

書 評

Henri Wald, *Introduction to Dialectical Logic*,
Editura Academiei, Bucureşti/B. R. Grüner
Amsterdam, 1975, 238 p.

アンリ・ヴァルド『弁証法的論理学入門』アカデミ
ー出版所、ブカレスト/B・R・グリューナー社、
アムステルダム、一九七五年、二三八頁

嶋 崎 隆

I

日本人による弁証法的論理学の著作といえ、寺沢⁽¹⁾、篠崎⁽²⁾、岩崎⁽³⁾・宮原諸氏⁽⁴⁾のものがあげられよう。寺沢氏の著作は体系的に書かれた唯一の著作であるが、ヘーゲル『大論理学』の体系をおおむね踏襲しており、この点で、観念論者ヘーゲルの体系構成をそのまま受けつぐことが科学的にみて妥当かどうかの問題が残っている。篠崎氏の著作は文字どおり「序説」であ

り、いまだ体系形成のための基礎作業にとどまっている。そして岩崎・宮原両氏の著作は独立した弁証法的論理学の体系的著作ではないが、現代自然科学の成果に即して弁証法の諸法則や諸カテゴリーについてきわめて幅広く論じており有益である。

さて、ソ連ではかなりの数の唯物弁証法または弁証法的論理学の著作が出版されてきており、そのなかでも M・M・ローゼンタール⁽⁵⁾および G・M・シトラックス⁽⁶⁾編『カテゴリー論』は日本でもなじみ深いものである。この著作では、現象—本質、原因—結果、必然性—偶然性、法則、内容—形式、可能性—現実性、個別性—特殊性—普遍性などの弁証法的カテゴリーが扱われている。独訳された、オルジェフ『体系としての弁証法』⁽⁷⁾、英訳のある E・V・イリエンコフ『弁証法的論理学』⁽⁸⁾などは、一定のオリジナリティーをもった著作である。また、東独には唯物弁証法に関係した著作は多数あるが、弁証法的論理学を概説のないし体系的に展開したものは意外と少なく、この点からすると、東独では上記ソ連の著作がかなり利用されているようである。だがたとえば、『マルクス主義哲学』⁽⁹⁾、『弁証法的・史的唯物論』⁽¹⁰⁾などの教科書の弁証法的論理学の当該部分をみると、その傾向は大体わかる。

以上の著作について第一にいえることは、理論的な継承方向がおおむね、ヘーゲル→マルクス・エンゲルス→レーニン→(スターリン)となっており、全体としてドイツソ連という方向性をもっていることである。これに対してヴァルドの著作はよりフランス的知性に裏づけられており、我々に新鮮な見方

と論点を提供してくれる(この点については本稿のIIを参照)。第二に、弁証法的論理といえども人間の社会生活から生じた思维的の営みに由来するものである以上、弁証法的論理学が史的唯物論によって基礎づけられることが不可欠であるが、この点からすると、過去の弁証法(的論理学)の多くはこの(実践的唯物論)の立場に至ってはいない(上述の『マルクス主義哲学』、岩崎・宮原両氏の著作などは(実践的唯物論)の立場からの一定の試みであったけれども)。たしかにヴァルドの著作にもこの点で不十分な面があるが、少なくともヒューマニズムと弁証法的論理学を統一しており、これが類書にないメリットになっている。

さて、ルカーチやフランクフルト学派のマルクス研究者は自然弁証法に否定的であり、ソ連・東独型の「弁証法的唯物論」(ディアマート)に批判的であるので、そこには弁証法的論理学の体系化の試みはない。そのほかに眼につくものとして、アメリカのトロツキー主義者G・ノヴァク『マルクス主義的論理学入門』があり、商品・貨幣論の分析がおもしろい。

II

ルーマニアの論理学(弁証法と形式論理学を含めて)の蓄積にはかなりのものがあると予想される。それを如実に示すのがA・ドミトリウ『論理学史』の大著である。これはI・M・ボヘンスキーの記念碑的著作『形式論理学』をも包括するものであり、古代ギリシャの論理学から数学的論理学、弁証法的論理

学(ヘーゲル、レーニンら)まで詳細に扱っている。それゆえ、本書のようなすぐれたものが出るのも不思議ではないであろう。本書の引用文献のかなりの部分はフランスのものであり、本書は明確にフランス的知性に裏づけられている。それは、方法は提示し、それに従って緻密に体系を展開するといったドイツ的知性でもなく、社会主義国ソ連の「弁証法的唯物論」——それはしばしばイデオロギー過剰に陥るが——のムードとも違う。「フランス的知性」という意味あいを以下の二点にまとめてみたい。

(1) 弁証法的論理学をヒューマニズム(人間中心主義)の精神と結合させており、弁証法を抽象的で冷たい論理の体系としていない。感覚や直観をもつ人間精神の全体を視野にいれて弁証法を論じようとしている。著者の手になると、弁証法も人間臭さに満ちたものになり、こうしてユーモア、比喩、直観、空想などに言及されるのである。

(2) 弁証法的論理学の形成はヒューマニズムの精神で貫かれるとともに、個別諸科学の成果を吸収することによって行なわれるべきである。もしそうでなければ、弁証法は宗教的教条にも似た、イデオロギー正当化の装置になってしまう。デカルト、ベルクソン、メルロロポントイらにみられるように、(自然)科学との密接な提携がフランス哲学の伝統であろう。著者は構造主義、現象学などと切り結ぶなかで言語学、文化人類学、心理学、生物学、数学的論理学などの諸成果をつとめて摂取するようになっている。

以上の二点のほかに、さらに二点を本書の特徴として付け加えた。

(3) 以上の(1)、(2)からもうかがい知れるように、著者の学問的視野はきわめて広い。たんに個別諸科学の成果を考慮しているのみでなく、過去と現代の多くの哲学を評価し批判する。また哲学史(論理学史)にも広い理解を示しており、古代中国やインドの論理学に対しても弁証法的立場から考察している。

(4) 多くの非マルクス主義的哲学者の見解を引用し、また数学的論理学や言語理論をとり上げているにもかかわらず、著者は弁証法的唯物論の立場を貫こうとしている。創造的反映論を主張する著者の思索過程は弁証法的柔軟性に富み、人間の思维の営みに対して実践の意義をも強調する。そのユニークさにもかかわらず、著者はオーソドックスなマルクス主義哲学者であるといえよう。

本書の構成は以下のとおりである。

- I 序論 現代思想における客観的なものと主観的なもの
- II 言語的コミュニケーションと観念の発生
- III 論理学史における論理的なものとの歴史的なもの
- IV 実践——知識の要諦
- V 唯物論的・弁証法的論理学の対象
- VI 知識の論理的形式の弁証法
- VII 弁証法的論理学を超越することの不可能性
- VIII 人間の精神と未来
- IX 哲学的復位

「序論」では、構造主義、現象学、ハイデガールの非合理主義が批判されたあと、人間の思维のもつ発問的性格、否定性、創造性などについて語られる。さきに述べた特徴の(1)と関連して興味深いのは、「科学とヒューマニズムの必然的統一」(p. 20)を主張した部分である。

「人間が自分から独立して存在するものを理解することができるのは、まさに人間的ヒューマンのみにみである。真理とは適切に反映された実在にかんする知識である。しかし知識はただ人間のなかに、人間をとおして、人間のためにのみある。」(ibid.)

人間は「人間的のみにみ」あるいは「擬人的(anthropomorphic)」(p. 1)にのみ、対象にかんする客観的真理を獲得する。ここには知識形成における主体—客体の弁証法的統一があり、反映論的な客観主義とヒューマニズムの統一がある。同様にして、「価値」も「事物が人々と接触したときに獲得する性質」(p. 1)であり、事物それ自体に価値は存在しないのである。この指摘は正しい。著者が「比喩」を強調するのもまさにこの立場からである。著者は第九章で「言葉の比喩的機能」(p. 228)について語る。たとえば、「眼にみえる—眼にみえない」という比喩的表現は、「現象—本質」という哲学的カテゴリーの「魔術的前史」と位置づけられる(ibid.)。まさに対象は「人間的のみにみ」知りうるものであって、こうして「比喩」は感覚と理性の間をつなぐものである。それゆえ、客観的な真理の成立にとって「比喩」は重要な役割をはたすのであり、ことばのもつ比

驗的エネルギーが欠けると、カテゴリーも成立不可能とされるのである。現代はレトリック復興の時代ともいえると思うが、著者のこのような視点は、レトリックの弁証法的解明の試みとして示唆に富んでいる。

第二章では、言語論、記号論などに基づき言語現象について論ぜられる。哲学界・思想界では、ま言語論・記号論が花ざかりであるが、この点からしても本章は興味深い。ここでは著者が結論として述べていることを紹介しておきたい。それは文字言語と口頭言語の調和的統一ということである。文字言語は人間の思考能力を著しく発展させたけれども、それは感性の犠牲による理性の一方的発展という重大な危機をはらんでいる。この点で口頭言語——それは肉声によって放たれ、話者の心理状態を如実に示す——の情緒的確實性がみなおされるべきである。(pp. 41—43)。

III

第二章までは序論的説明であり、第三章から第五章までが弁証法的論理学の一般的説明とみなされよう。第三章では、唯物弁証法的世界観からユニークな論理学史把握がなされ、本書の大きな特色となっている。著者は、本質の論理学——関係の論理学、演繹の論理学——帰納の論理学、基礎的論理学——弁証法的論理学という三対の組み合わせで論理学の歴史的諸形態を考え、論理学は以下の順に成立したという (pp. 48—49)。

(1) 本質の・演繹的・基礎的な論理学——アリストテレス

(2) 関係の・演繹的・基礎的な論理学——クリシュネッポス
(3) 関係の・帰納的・基礎的な論理学——エピクロス、ペー
コン

(4) 本質の・演繹的・弁証法的な論理学——ヘーゲル

そしてヘーゲル論理学とはそもそも関係の論理学でも帰納の論理学でもなくて、たんにそれは上記の(1)のみを発展させたにとどまり、(2)、(3)の論理学を継承・発展させなかったという (p. 46)。これまたユニークな論理学史観というべきであろう。ここで「基礎的論理学」といわれているものは、形式論理学、古典的論理学、アリストテレスの論理学として規定されているものである (p. 104)。著者は I. M. ボヘンスキー、J. ルカシェヴィチらの数学的論理学者の見解も考慮して以上の定式化に到達している。従来、形式論理学サイドから、アリストテレスのオルガノンは性質論理学、名辞論理学とみなされたり、数学的論理学の一階の述語論理の特殊型と解されてきたし、またクリシュネッポス (ストア派) の論理学は命題論理学とみなされてきたが、著者の見解も考慮に値するものもっている。評者が賛成するのは、はじめから形式論理学、弁証法的論理学と固定的に区分しないでより包括的な論理学観を前提にしていることであり、この点で評者の論理学観と共通するものをもつ。ただし問題点として、①数学的論理学の位置づけがあいまいなこと、②ヘーゲルは本質論で関係 (Verhältnis) の論理学を克服して概念論へ至ったわけだが、それを指摘していないこと、③三対の論理学の規定が必ずしも十分でないこと、④アリスト

テレス『形而上学』、『自然学』などに始まる弁証法的カテゴリー論への考察が不十分なこと、などがあげられよう。

著者は古代中国の恵施（c. 380—c. 300 B. C.）の論理学が唯物論的かつ弁証法的であったことを指摘しており、さらに古代インドの論理学も否定性の弁証法を展開したという（pp. 49—53）。これは著者の視野の広さを示すものである。古代ギリシアについては、ソクラテス→プラトン→アリストテレスの発展が概念論→判断論→推理論の展開に対応して説明される（p. 58）。このような見解は目あたらしいものではないが、著者の概念・判断・推理論は全体的によくまとまっている。アリストテレスの三段論法論にかんしては、彼が媒名辞（middle term）を発見したことの意義を強調しており、これはたしかにそうなのだが、アリストテレスの三段論法論と伝統的論理学（一七世紀以後に形をととのえる）のそれとは基本的に同形でありながらも性格がまったく異なることにも言及されるべきであったと思う。

さらにまた、著者は「本質」の観念を追求するアリストテレスの論理学と「法則」の観念を追求するストア派の論理学を対照しており、興味深い（p. 56）。ついでにいえば、第六章では、ヘーゲル論理学の仮言判断とクリシュネッポスの仮言判断との比較も行なわれている（pp. 158—159）。

第四章では認識形成における実践の役割を中心に展開されているが、残念ながらこの点に限れば、日本でマルクス主義哲学を学んでいる我々にとって目あたらしいものはほとんどない。

本章の結論部分で「実践はそれゆえ、知識のひきがね、原動力、基準および目的である。実践は知識の結節点である」（p. 88）と述べられる。本章ではそのほか、知識の対象としての本質と法則との区別や帰納法について興味深く語られる。

第五章では唯物論的弁証法の三メモメントが指摘される（pp. 101—102）。

(1) 存在論——自然と社会に内在する発展法則をもっとも一般的にとり扱う。

(2) 認識論——対象と認識主体たる我々との関係、とり扱い、知識の発展のもっとも一般的な法則を対象とする。

(3) 弁証法的論理学——さまざまな論理的諸形式間の関係を対象にし、具体的思惟の発展のもっとも一般的な法則をとりに扱う。

この規定はきわめて明快であるけれども、著者は弁証法・論理学・認識論の三者の統一性というレーニンの命題の代りに存在論・認識論・（弁証法的）論理学の三者の統一を主張しているかのようであり、問題になる箇所であらう。

本章ではさらに、ソ連の論理学者が多数引用されて弁証法的論理学と形式論理学（基礎的論理学）の関係について考察されており、また弁証法的矛盾概念についても論じられる。後者の問題に対する叙述は少しわかりにくいところがあるが、十分に示唆的である（N・ボリア、K・アジュケヴィチ、M・エビ、アリストテレスらが検討される）。

IV

IIIでは、論理学の諸形態とその歴史的発展、唯物弁証法の三モメント、弁証法的論理学と形式論理学の関係など、論理学にかんする一般的・基本的な説明に対する考察がなされた。本書の第六、第七、第八章はどちらかというところ、よりたまたま、特殊な説明になっている。

第六章では、概念・判断・推理について詳しく展開され、そのあと帰納と演繹の関係についてきわめて具体的に論じられる。評者にとって本章がもっとも有益であり、かつ興味深かった(本章には五一頁があてられ、量的にも一番多い)。まず概念については、「概念の論理構造は二つの要素からなる、つまり領域(sphere)と内容(content)とからなる」(p. 125)と指摘される。「領域」とは何かについてはわかりづらい面があったが、例をあげて説明したい。たとえば、サカナの概念の「領域」はフナ、マグロなどと指示される個体の集合のことであり、「内容」とは水生、エラ呼吸といった、サカナのもつ本質・特徴のことである。概念とはまさにこの二側面(個別性と普遍性に対応する)の統一であり、この二側面の対立のゆえに、概念は判断における主語(個別性)と述語(普遍性)に現実に分化する(p. 124)。そして推理とは、この分裂を媒名辞によって媒介する過程である(pp. 174-175)。この概念・判断・推理論はヘーゲルばりの弁証法によって展開されているが、叙述に無理はなく内容が豊富である。とくに判断論では、三つの弁証

法的判断について述べられ、興味をひく(p. 174)。第一は「SはPかつ非Pである」という弁証法的対立の判断、第二は「SはPではなくて非Pである」という「否定的―肯定的な判断」、第三は「SはPでもなく非Pでもなくて、Pかつ非Pである」という「否定的―否定的―肯定的な判断」である(第三の判断の例として「絶対的な真理は感覺的具体でもなく論理的抽象でもなくて、論理的具體である」があげられる)。

そのほかにも、数学的論理学における「実質的含意のパラドックス」(p. 110)という命題形式でなぜ「U」だけが偽とされるのか)に対するユニークな解釈があるが(pp. 160-163)、最後に帰納と演繹の叙述について考察したい。

帰納と演繹にかんしてはすでに第四章で序論的に説明されていた。帰納では、知識は感性的具体から論理的抽象へと進み(ここに飛躍あり)、その原理は「観察されたすべてのAがBであるならば、すべてのAはBである」(p. 80)とされる。演繹では、思惟は論理的抽象から論理的具體へと進むのである。著者の眼目は「帰納―演繹の矛盾の統一」(p. 79)をしっかりとつかむことにある。つまり、帰納は演繹にまで完成されないと科学的な帰納法にならないが、帰納は演繹の基礎を認識論的に提供する点でより根本的である。そしてまた、帰納は演繹法と一般的概念の助けなしには展開されえない(pp. 79-80)。ここに帰納法の例をとる(pp. 177-189)。A' B' C' Dは観察された個体である。

- (1) A, B, C, Dは人間である (2) A, B, C, Dは労働

する存在である→(結論)すべての労働する存在は人間である

実は第一前提のなかに以下の演繹が含まれている。

- (1)これこれの諸特徴をもつすべての存在は人間である
- (2) A、B、C、Dはこれこれの諸特徴をもつ→(結論) A、B、C、Dは人間である

そして第二前提のなかに以下の演繹が含まれている。

- (1)これこれの諸特徴をもつすべての存在は労働する存在である
- (2) A、B、C、Dはこれこれの諸特徴をもつ→(結論) A、B、C、Dは労働する存在である

「結論」のなかに以下の演繹が含まれる。

- (1)この限りで特徴づけられたすべての労働する存在が人間ならば、そのときすべての労働する存在は人間である
- (2)この限りで特徴づけられたすべての労働する存在は人間である→(結論)すべての労働する存在は人間である

これには「肯定式」(C.U.P.P.T.C)が使用されている。こうして帰納は演繹を前提的に利用している。そしてまた、科学的帰納が完成された場合、それは演繹に転化しうろ。

- (1)すべての労働する存在は人間である
- (2) A、B、C、Dは労働する存在である→(結論) A、B、C、Dは人間である

こうして著者は、以上の帰納と演繹の弁証法的統一を理解しない分析哲学者(A・J・エイヤー、A・タルスキール)を鋭く批判する(pp. 181—183)。また著者は、三段論法論が「不

当前提の虚偽」を侵しているという従来の批判に対して明快に答える。彼らは「蓋然的・全称的な判断」と「必然的に普遍的な判断」(科学的認識をもたらす判断)との間の本質的区別を理解しない。三段論法では、大前提として普遍的・必然的な判断が確立されたのちに未知の新しい個物が対象にされるのだから、そこに新しい知が形成されるといえる。この「帰納—演繹的過程」(p. 180)は以下のとおりである。

(帰納)

- X、Y、Zは死すべきものである
- X、Y、Zは人間である
- すべての人間は死すべきものである

ソクラテスは人間である

(演繹)

ソクラテスは死すべきものである

著者はミルの帰納法論の不十分性を批判しつつ、「三段論法は普遍的なものの個別化と可能的なものの現実化を示す」(p. 180)と結論する。この魅力的な指摘はヘーゲル推理論を想起させるが、ヘーゲルを直接に参照はしていない。細かい点は省いたが、著者の以上の弁証法的分析には画期的なものがあるといえよう。——もつとも不足な点がなくはない。それは、①帰納法の結論に「肯定式」が内含されているというとき、これはあくまで擬似的なものであり(帰納的飛躍がある)、その点、②二つの前提における演繹と少し異質ではないかということ、③ミルの帰納—演繹論はもつとついで分析しうる内容をもつこと、④帰納の真理は類推にありとするヘーゲルの推理論をもつと吸収すべきこと、⑤「帰納は論理的形式でなくて認識過程

である」(p. 77)とくり返し強調するが、そこでは「論理」の意味が二義的になっており説明の余地があること、などである。

第七章は短いものであり、J・ラクローア、J・マリタン、M・メルロロポンティ、J・P・サルトルらを批判しつつ弁証法的論理学が擁護される。第八章では、実験、仮説、分析と総合などの素材が扱われており、四種の知の上昇過程の叙述が興味深い(p. 213)。

V

第九章は「余論」ともいうべきものであり、現代の非合理主義や分析哲学の批判をおしてさまざまな人間の精神的能力や言語現象を弁証法的に捉え返している。「言語の下論理的形式」(比喩、語順、イントネーション、リズムなど)、直観の四形態などの分析が面白いが、とくに興味深かったのはトートロジー(AはAである)とパラドックスにかんする考察である。

トートロジーでは情報は最小限であり、判断数の増加に従い情報量がまし、ついに思惟は最大限の情報を含むパラドックスに到達する。思惟は論理的形式からすると、トートロジーとパラドックスの間を動いていることになるという(pp. 228—230)——さてこの最終章で奇妙なことがある。それは「弁証法」という節で弁証法的カテゴリーについてわずか三頁しか言及されていないことである。弁証法的カテゴリー論に対するとり扱いは、不十分性が本書の最大の欠陥であろう。この点からすれば、ヘーゲルの弁証法やマルクスの経済学批判などをもっと吸収す

る必要があるだろう。しかし本書が類書に比べてユニークでゆたかな論点を提供したことの意義はきわめて大きい。

(1) 寺沢恒信『弁証法的論理学試論』大月書店、一九五七年。

(2) 篠崎武『弁証法論理学序説』泉文堂、一九五七年。

(3) 岩崎允胤・宮原将平『現代自然科学と唯物弁証法』大月書店、一九七二年。同上『科学的認識の理論』大月書店、一九七六年。

(4) ローゼンタール・シトラックス編『カテゴリー論』上・下、青木書店、一九五八年。

(5) S. M. Orudshew, *Dialektik als System*, Berlin, 1979.

(6) E. V. Ilyenkov, *Dialectical Logic*, Progress Publishers, Union of Soviet Socialist Republics, 1977.

(7) 以下、弁証法的論理学にかんする最近の関連の文献をあげておく。

Ю. А. Харина (ред.), *Категории социальной диалектики*, Минск, 1978. [『社会弁証法の諸カテゴリー』E. Ф. Солопов, *Введение в диалектичную логику*, Ленинград, 1969. [『弁証法的論理学入門』Ф. Кумф, 3. Оруджев, *Диалектическая логика*, Москва, 1979. [『弁証法的論理学』П. Н. Федосеев и др., *Материалистическая диалектика*, Москва, 1980. [『唯物論的弁証法』(20) G. Bartsch = G. Klimaszewsky, *Materialistische Dialektik*, Berlin, 1975. は弁証法にかんする一般的な著作であ

る。

- (9) A・コージング責任編集『マルクス主義哲学』（秋間訳）上・下、大月書店、一九六九年―七〇年。
- (10) レイトロー他編著『弁証法的・史的唯物論』（秋間訳）上・下、一九七二年。
- (11) G. Novack, *An Introduction to the Logic of Marxism*, New York, 1966.
- (12) A. Dumitriu, *History of Logic*, Vol. 1—4, Kent, 1977.
- (13) なお、中野幸次『初期ストア論理学考』（現代文化社、一九七六年）はクリシニッポスを中心に詳細に展開しており、ストア論理学をたんに命題論理学とみなす立場を批判

する。

〔付記〕本稿提出の直前にヴァルド博士より丁寧な自己紹介のお便りが届いたので、以下に博士の経歴を紹介しておく。一九二〇年ブカレスト生まれ。ブカレスト大学にて哲学の博士号を取得し、以来、同大学にて認識論、論理学および言語論を教授する。主要著作に『現実と言語』（一九六八年）、『記号的人間』（一九七〇年）、『言語と価値』（一九七三年）および『思考は話すことにより生ずる』（一九八三年）がある。なお博士は社会・政治科学のルーマニア・アカデミーの会員である。

（一橋大学助教授）